

イエスは、「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい」（34節）と語り掛けています。しかし、イエスが生きていたユダヤ社会には、既に「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」（レビ記 19:18）という掟が定められていました。正直、「新しさ」が感じられません。結論から言えば、イエスが示された「新しさ」は、「互いに愛し合いなさい」という掟そのものではなく、互いに愛し合うための根拠にこそあります。イエスは、従来の掟であった「自分自身を愛するように」ではなく、「わたしがあなたがたを愛したように」ということにおいて、「互いに愛し合いなさい」と求めています。他者を愛するというときに、その根拠を自分自身のなかにはなく、イエスご自身が示された愛のなかに求めるよう促されているのです。

イエスは弟子の足を洗う場面で、本日の愛の掟と同じような言葉を語っています。「わたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」（13:14）。足というのは、人間の部位のなかでも、あまり綺麗とは言えない部分です。それゆえ、人に見せたり、人に触れられたくない部分であり、普段私たち自身の目からも覆い隠されている部分でもあります。足は、人間としての愚かさや弱さを象徴していると言えるでしょう。しかしその足の部分にこそ、イエスはかかわろうとされたのです。そのことに加えて、愛について語られる本日の箇所が、弟子のユダとペトロの裏切りに関する記事で挟み込まれているのも偶然ではないでしょう。つまり、どうしようもない人間としての弱さがにじみ出る、その部分を受け止めようとされたところに、「わたしがあなたがたを愛したように」というイエスの愛の形が示されています。

キング牧師は、ルカ福音書 10 章に記された「善きサマリア人」のたとえ話（負傷して身動きできないユダヤ人を、民族的対立のあったサマリア人が助けるという内容）について次のように説教しています。「あのサマリア人が傷ついている人のことをまずユダヤ人として考えたならば、彼は立ち止まらなかったことだろう。ユダヤ人とサマリア人とは全く交渉を持たなかったからだ。しかし、そのサマリア人は、彼をまず第一に人間として見たのであり、それが偶然ユダヤ人だったというに過ぎない」。神を思うが故に、自分もまた破れを持つ一人の人間であることを思う。そこから、「互いに愛し合う」ことが始まっていくことをイエスは示されたのです。

（文責：望月達朗牧師）

